

171
69
10

近藤氏藏書

			和書門
一〇	二八	傳記	
冊	號	函	類

湖亭涉筆

舜水先生祭奠儀注

文恭親蹟目錄

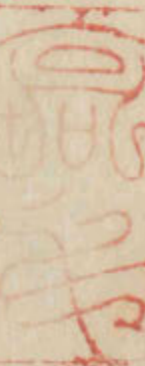
史館雜事記

小野久米八 口語

蘆澤八十吉元種口語

朱文恭遺事

覺自十二歲春師事文恭不限歲月而至十五歲春病
瘧還鄉遂不復侍函丈執弟子職不滿三年而歛枕篔簹
備灑掃日夜供給僅受孝經小學大學論語句讀為學之
方作文之法一無所聞還鄉之後玩歲愒日放浪自恣今犬馬
之齒將頽而學業不成其所存者稍辨華音一事由其課
程嚴峻晨讀夕誦故至今不忘耳當時及門者相繼淪謝而
覺獨存皓首黃髮淺陋不異童穉時其忝門人之名不
亦可羞之甚乎往年蒙命與今井弘濟編次文集撰
述行實亦頗詳矣追憶宿昔文恭自持嚴毅接人和愉與客



談論。問及俚諺嘲笑之事。其餘當時所見聞。雖不足書之簡冊。而又恐一旦溘先朝露。子孫不能知之。故不論雅俗。隨所記憶。漫筆于此。若講學論文之言。則備於先輩安東庵所纂心喪集語中矣。

①文恭朔望必望拜。黎明門弟子掃堂設几。展檀備香燭。文恭披道服。戴包玉巾。東向而拜。口誦細語食頃。竟不知其為何等語。蓋文集所載庚寅年永曆四年陷難告天文等類也。作書牘。不立稿。或楷或草。揮筆輒成。作大文字則立稿。文成而紆行室中。殆數十返。朗誦其文。有不允愜者。復座改之。蓋音節響亮。抑揚頓挫之謂。而門人輩皆不能也。

②文恭喜賓客。不擇貴賤。非有疾病事故。未嘗不應接。饗客隨家有無。必竭其誠。客有問起居。憚其勞勩。不見而去者。意不懌曰。客何辭主人。若鉅儒碩士來訪。論道談文。則自日午至夜半。覺等惟思困睡。而文恭未嘗厭倦也。不能飲酒。而喜客飲。時或對棋。棋不甚高。藏書甚少。其自崎港帶來者。不過兩簾。而多闕失。完全者亦少。好看陸宣公奏議。資治通鑑。及來武江。方購得京師所鈔通鑑目。綱至作文字。出入經史。上下古今。娓娓數千言。皆其腹中所蓄也。

③文恭嘗曰。讀書有三到。曰心到。口到。眼到。又曰。作文有頓承應結伏呼啓轉等法。當時童年。不能請益。至今為憾。

④大啓有冒。有承。有腹。中謝自敘。用伏願無任等字。或駢詞。或散體。小啓各色簡略。全用散體。

⑤舉子場屋之文。上書本貫姓名。及摺而緘之。紙糊其上。捺印。送考試官。謂之彌封。

⑥明朝之制。軍門以上有闕。三槐九棘六科。會議而推之。三槐北向。三公也。九棘分左右。左為駙馬五軍都督府。右為九卿都察院。通政司。大理寺。光祿寺。太常寺。太僕寺。鴻臚寺。尚寶司。順天府尹。是也。六科南向。吏禮戶刑兵工六都給事也。班定議。協選一人。書姓名。謂之真推。其下又書一人。謂之陪推。其下又書一人。謂之陪推。有御畫。即以其人補官。今按周禮朝士掌外

朝之法。左九棘。孤卿大夫位焉。右九棘。公侯伯子男位焉。則明之官制。亦倣周制也。

⑦省有三司。都司。布政司。按察司。是也。有軍門巡按。監察御史。鹽運司。府有知府。同知。通判。推官。經歷。知事。簡較。照磨。列有知列。同知。列判。吏目。縣有知縣。縣丞。主簿。典史。衛有鎮撫。經歷。知事。所有千戶。副千戶。百戶。鎮撫。吏目。五所。鎮撫。指揮使。指揮。同知。指揮。僉事。十八指揮。是也。凡此皆非文恭所書者。少年時聽其話。所劄記。必有舛誤。覽者考究焉。

⑧北京用錢。大約與本朝同。河南以錢十一文換取一兩。其餘處處不同。

⑨十錢為一兩。十六兩為一斤。一升之米。其重石九十二錢。

⑩松江餘姚俗。罵人曰長工。北人罵人曰黃桑。八月雨曰木犀雨。

⑪吳山開。越水涸。他山石。鍊劍鏑。皆刀名。

⑫找語。找尾。言語既了。又言其餘也。找尋。尋究也。找音驛。與划同。

⑬鶻突。鶻者鷂屬。飛颺無定。故言語無定。不可把住者。謂之鶻突。

⑭鶻崙吞棗。言不辨其狀也。鶻即崑字。音急訛作鶻字。或作

囫圇。或作圖。皆俗字也。

⑮五十川剛伯問光棍老棍等義。文恭對曰。女媧詭詐。意在誑騙。欺人不循道理。不懼笑耻者。謂之光棍。積年狡黠。油嘴騙舌。

者。謂之老棍。紮詐錢財者。謂之女媧棍姦。獨之尤者。謂之精光棍。無籍

亡命。謂之無皮老棍。又曰沒皮光棍。光棍者言不可捉摸也。

⑯行路唱歌者。俗謂之道上行殯。以譬殯葬時乞兒唱挽歌。甚鄙之也。按道上行殯。本晉袁山松事也。

⑰諺曰。清明斷雪。穀雨斷霜。又曰。白酒紅人面。黃金黑盜心。

⑱有媒人極言女子之姣。娶之而醜。夫家大怒欲毆媒人。其人罵曰。花對花。柳對柳。破糞箕對生苕帚。生音芝。俗字。猶言敲苕帚也。

⑲蕪列一知縣見翁仲。問通判曰。為何物。通判誤對曰。仲翁。知縣作詩朝之日翁仲緣見翁仲。問通判曰。為何叫仲翁。只因書讀欠工夫。自然難入。

林翰院。祇好別種作判通。

③文恭酷愛櫻花。庭植數十株。每花開賞之。謂覺等曰。使中國有之。當冠百花。迺知或者認為海棠。可謂櫻花之厄。義公環植櫻樹於祠堂旁側。存遺愛也。

④酒帘亦曰青帘。以木綿為之。不寫字。廣終幅。長三四尺。上下皆紅。城市酒旗。以藍布為之。上下用紅絹。鄉村間以草為帘。貫於竹竿。標於大木之上。曰酒望子。他如貫酒之家。以板為之。標酒坊二字。寫神仙留玉珮。卿相解金貂。中山千日酒。開樽十里春等句。如此俗聯。不可勝數。

⑤文恭不作詩。嘗曰。今詩比古詩。無根之華。深無益于民風。世教而學者汲汲為之。不過取名干譽而已。即此一念。已不可入於聖賢大學之道。文恭務為古學。視時文為塵飯土羹。况於詩乎。亦以明季浮薄之流。祖尚鍾譚袁中郎之說。詆訶何李。凌蔑高楊張徐。猶文章之徒。攻擊道學之士。不唯無益。而反有害。故絕口不為身。文恭非不曉詩者。其論李杜曰。究竟李不如杜。李秀而杜老。李奇險而杜平淡。然不奇與之極。造不得平淡。有意學平淡。便水平煎豆腐湯矣。苟非深于詩者。不能道此語。

⑥竹洞野友元示文恭詩云。在安南旅寓所賦。蓋自崎港所傳也。今錄于此。治劇從容。緩策街鈴。軒無事日清談。隼旗畫

戟明千里。紙帳繩牀自一庵。全奏屢陳容容和。玉山不動看
賓酣。我來邂逅逢新政。忘却漂流身在南。其工拙非所敢知。
真滄海之遺珠也。寬文己酉之秋。義公張宴環景樓。泛
舟淺草川。野傳唱聯句。文恭續之曰。山歟螺黛遠。高閣徹
晴空。山指筑波山。閣指大悲閣。覺時童行侍側。平生所見止
此二句。

④文恭暇日嘗謂覺曰。我在中國所經歷諸名勝之地。試與汝言
之。三閔。蒼廬溝橋。大石橋。滹沱河。荆軻易水。燕昭王黃金臺。楊
家府。在北直隸順天府。蘭亭。在紹興府。洞庭湖。在岳列。岳
陽樓。臨湖水。防風池。在會稽府。會稽之側。嚴子陵釣臺。在嚴

列。戴安道剡溪。在嵊縣。雁宕。在台溫二列之界。冬夏有雁。金陵。
蔣山。石頭城。烏衣巷。采石。燕子磯。在南直隸應天府。臨春。結綺。
望春。三閣。景陽樓。今為荒墟。子虛。東野射鴨堂。在蕪湖。烏江。
在蕪湖上流。金山。北固山。在鎮江府。甘露寺。劉玄德試劍石。在北
固山。姑蘇臺。虎丘。寒山寺。在蘇列。滕王閣。鐵柱宮。石鍾山。鄱
陽湖。在江西。表忠觀。在杭列。林和靖放鶴亭。蘇公堤。在杭之
西湖。至今猶盛。桃源。君山。東坡赤壁。在湖廣。周瑜赤壁。則非
此處。祭風臺。今止。五溪。在湖廣。江西之界。辰沅之地。漢伏波將
軍駐兵處。黃鶴樓。在武昌。召伯埭。在揚列。邯鄲。在彰德府。
孤竹。在名府。登封。漢封高山之地。虎牢。成皋。鴻溝。敖倉。彭

城許昌。官渡。鄴。輾轉。少林。太室。在河南。金谷園。銅雀臺。今為
荒草。測景音影臺。只存量天尺。秦時大夫松。至今猶存。大可十
圍。白松亦在河南。大松樹三株。遠望之。宛如白龍。松有香。近
而摩之者。到家手猶香。凡此皆可追憶者。其餘不知幾許。今
忘之矣。覺退而筆之。雖不足考據。而當時所親聞者。若參
以一統志。容有差誤。今想其事。亦逾五十年矣。可勝一慨。因
附于此。

右湖亭涉書

恒例

一 四月十日又恭初書。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 仲仲。其係例年。其係例年。其係例年。其係例年。

一 華の道点檢多破壞不足と物もくしとを前方の中本
可取洞多し前口。一印と象蒸淨潔。の令洗滌并階
庭掃除と後。為。食次令命方、初事役人方の中也
可令潔掃也

一 習禮と前方。四方と掛戸並木仕掛並是と后。初事
役人方の中事法方、のト也并浦物也並海物也。役人
方の中也

一 陳設と華の祠事役人、中後前とひかくとに執之七
くろと之牲くか五菓散饗あも毎季日物也し指。
但今之執之と漢字と名目とんち之執るしと付と一

一 入。沙路と后下人そ人十七分の祠事とあ後夜
中と。料理仕之やんを方の中。海と指。為るは料理
人等、とをてり

一 陳設。入用と海物菓菓菓多珍菓ホ一切と海物
あも為る初事役人方付とん。の初事役人、中後後
海と法手形判形ホ。初事役人、中後海と

一 儀事。執事と。紙と。為る。書。腕。ら。お。思。前。り。
祝板。より。是。年。月。支。干。并。代。指。の。代。各。支。改。以。申。と。る
又。之。毎。年。恒。式。と。し。て。若。法。自。文。の。象。は。起。て。能。或
ハ。有。故。り。の。象。は。起。て。能。時。と。不。を。お。思。為。る。お。仰。て

格の中より

一 帛を白羽之手切古物戸を清丸巻紙之上に置き付振
置但牛羽之重切并鹽漬所し手拭を初きて後人等
清丸おしゆ也

一 以上香伽羅三瓣の巾細戸を清丸のり。初きてせき
事

一 巾細戸の巾方十寸七寸の巾裏の初きて、お清丸おき
の巾八寸、十寸あり

一 湯敷の巾方の持り之種頭を人の目付元を十寸の巾
目の初きて、お清丸何枚取忘し之巾お勤指之巾

一 巾細戸、のりおきお清丸の巾細戸の巾細戸の巾細戸
付方、ひかくみし

一 庭燎の儀は持り之種頭を十寸の巾裏の初きてお勤し初
きてし階下、不寝と書り之巾の種頭を十寸の巾裏
巾方の十寸の巾裏おき四人の代、お勤指之巾細戸、
のりおき此おきお七人の持組のお勤 湯成り

一 九人お置但おきおのりお清丸の巾細戸、のりおき
一 巾裏お置但おきお清丸の巾細戸の巾細戸、と先手

一 巾裏お置但お清丸の巾細戸の巾細戸、と先手
お清丸の巾細戸の巾細戸、と先手
お清丸の巾細戸の巾細戸、と先手

入るる者あり。多分とんりむこり家仍目付なる可成り是并
沙代おしえお名来ははく掃お取中阿けをておと
是又り家仍目付なるのとをこり

一 沙代お康と後迄執る并物えとえお弱也(沙代と新
理り家原氣し沙代おしえをいぬ沙代迄執るし介り
之種はら目付付え以下一回に載り取積り初を後人
方。扱ひし者も後人方と申屋中おの取沙代も夜
燒之島。おかし口持り之種お執り迄執る中史彼の
被り執りえ。申り申りお取しえ。申り申り
取頂戴と後らぬとある事

一 撫る服忌と改と海山と服と割度とを申り

舊例

一 貞享元年甲子初を送還初年十二月十日遷とし
儀存り家もし 若し様沙代者事らる事。初を
以系沙代はさほ。案三爰此と後依りてし。お名
案但儀名況又迄執るし。申り申り。後系儀名
と加此以下等也

一 同二年丑四月十日お取し。若し様沙代者事らる事

系沙代は後と名りし。お名年し。石絶

一 申手扱と申り。申り申り

一 諸當之役ハ鹽洗し役ナリ

一 諸相位ノ席ニシテ細戸ノ制ナリ 此代物ノ席ハ初巻揚子ニ
みく毛種ト相位ノ神也

右 諸系訪ノ時毎度ニ

一 貞享三年四月十日 菅ノ様 諸相交々ノ系

一 同日四年四月十日 菅ノ様 諸相交々ノ系

訪

一 元保三年四月十日 菅ノ様 諸相交々ノ系

前規

一 同日二年四月十日 菅ノ様 諸相交々ノ系

一 同日三年四月十日 菅ノ様 諸相交々ノ系

一 同日四年二月十日 菅ノ様 諸相交々ノ系

一 菅ノ様 諸相交々ノ系

一 諸儀等如例祝文ハ臨時ニ

一 向後忘りしハおふそ 毎度ノ書以テ代物ノ系

一 人下下即し役式ヲ以テ自方ノ系

一 向後忘りしハおふそ

一 向後忘りしハおふそ

一 菅ノ様 諸相交々ノ系

一 向後忘りしハおふそ

一 菅ノ様 諸相交々ノ系

已上高階例階未嘗之切石等仕立巻蓬之下并門外巻
蓬之下とて道筋に管切石仕立外又今書付と云ふ
中尾中村新六に依り付四方に掛戸勝手し床敷
作り是より依りしは云ふ一取多付と云ふ
右回十條二月寸下百系請と云ふに依り

一月年四月十日沙代村少正修理秀堅

一月五年申四月十日代村白井右左衛門信胤

一月六年酉四月十日代村頼以子守守博

去し年江 宣和初等とし修理南宮月初公修理等

し為内妻尾切石勝手所等取付系等と云ふ

出年の中

一月七年戌四月十日代村大竹権助

一月八年亥四月十日沙代村松平源左泰寛

一月九年子四月十日沙代村長尾源兵衛忠重

一月十年丑四月十日沙代村大竹権左如衛

若尾孫右代村左衛門忠重

一月十一年寅四月十日沙代村松平源左泰寛

若尾孫右代村左衛門忠重

一月十二年卯四月十日沙代村大竹権左如衛

若尾孫右代村左衛門忠重

一月十三日辰時十分浴也松平源氏泰寬
多原孫少佐也松平源氏泰寬

一月十五日午四月十分浴也松平源氏泰寬
多原孫少佐也松平源氏泰寬

一月十六日未四月十分浴也松平源氏泰寬
多原孫少佐也松平源氏泰寬

元祿十一年戊寅議改儀節當以此下所載為據
儀節并執事之式

儀節

陳設祭器

具牲

執事者鞠躬拜興拜興拜興拜興拜興平身序之

入門盥洗

階下揖登自東階至香案前跪上香降神酌酒鞠躬拜
興拜興拜興拜興平身

離拜位東面立

奠茶

供饌

詣香案前跪上香

奠三獻

薦帛

諸執事皆跪

祝讀祝畢

諸執事皆起立

俯伏興拜興拜興平身

下堂階下揖

焚祝瘞帛

執事皆揖

禮畢

執事 以癸酉四月所定為準

陳設

司盥

司爵

司爵

司帛

傳饌

傳爵

奠饌奠爵接帛

布衣 安積角兵衛

素襖 淺沼四郎八

同 服部新介

布衣 淺羽傳四郎

同 大串平五郎

日 上彦四郎

日 津田兵衛

日 白井生絲衛門

日 人見又左衛門

日 中村新八

祝

安積南兵衛

省牲監饌

淺沼四郎八
服部新介

祝文之式

維

貞享二年歲次乙丑四月庚寅朔越十八日丁未參議

從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀敬昭告于

明故徵士文恭朱先生歲序遷易諱日復臨不勝感愴

敢以清酌庶羞之奠祇致祭事尚

饗

右先季湯自刃以爲之好祝文也此其故也
可也然時勢不之可測汝等後當之也

維

元祿六年歲次癸酉四月甲戌朔越十八日辛卯正四位下右

近衛權中將源朝臣綱條臣朝比奈泰雄謹致祭于

明故徵君文恭朱先生之靈曰歲序遷易諱日復臨不勝

感愴敢以清酌庶羞之奠祇致祭事尚

饗

右少代源朝臣每度一進之徵君好之徵士也
其好光 其好標之好也上之碑向之明徵君

と申すは昔に於て凡そ今日以後後君と申すは
のり

元禄十一年戊寅四月議改儀節以

西山公所定墓祭儀節為準據參酌考定以為永式

陳設祭器具牲執事者鞠躬拜興拜興拜興拜興拜興

序立

祭主入門盥洗階下揖登自東階

參神就拜位鞠躬拜興拜興拜興拜興拜興

降神至香案前跪上香酌酒俯伏興拜興拜興拜興拜興

位東面立

進饌至拜位跪

奠初獻爵

奠帛

祝讀祝文

諸執事皆跪
讀畢起立

奉饌

奠亞獻爵奉饌

奠終獻爵奉饌

佈食

奠茶俯伏興拜興拜興平身下堂階下揖焚祝文瘞帛

諸執事皆揖禮畢

儀法 必宣 四目 改之

一 十分末明神を分一有あり次第布衣は初をき、兼信切
石し三巾と形を水場に向手ありお海階下におう正
面、向つ揮、束く階をうておま向、入相位、躬多巾四
相平して香案の案又跪や香合し香を取て上香付身
増那し身と持来んそと戴、洒と香あし下又そと
身とそわくそと、呈俯伏再び早く相位ととも丸
を向ありふり又跪束又向く之版美索類と修へ早く
又相位、初く跪く付身お就の身と持来るそと戴
眞鏝、波を付鏝、帛と持来ん、そと戴、眞鏝、波す
帛と修へ早く、祝くと修此時跪く祝又早て奉鏝

瑞々然 糸蒸しえ

一 香炉 大小二

由そつちゆふは
うゆ

一 方茶碗 一

一 小茶碗 一

一 盃 一

一徳利 四

内ニツチ申さる、あや

一ちまぐ 十

内 五フク錦子
五フク青磁

一子燭 二

一火鉢 一

一火筒 一

一火筒 一

右、前房に書ある

一漆付砂鉢 六

一甲鉢 五

一火鉢 三

一火鉢 十枚

一足折大皿 三

右、甲申年江戸からお伺いし、いふは、是迄は、お利
と申す、是れを、とけ、交、昔、口、永、久、方、お、御、

お積り、さ、る、

寅、二、日、共、

改定 通俗儀記

四月十七日、お申す、床、設、仕、之、未、終、説、執、り、階、下、列、

湯足將与人、座燎燭セ初者明、湯代おるゑと、一方のヤ
 ぎ、徳執子階下、二行、列し、四拜、平身司盟司言司帛
 各其位、祓侍饜侍饜眞饜并祝者、各其位、序立、おと
 門、入鹽洗所、至、司盟杖を掲げ、手中と進め鹽洗、予、
 祭と階下、下、赴き、おと、向て、正之、揖、左階より、昇、侍
 時、司饜、侍饜、中、司言、と、饜、と、裁、持、と、お、立、と、り、司言
 又、授、く、司言、司言、と、奉、酒、と、斟、司言、と、持、と、予、
 向、と、立、お、と、と、お、よ、入、お、位、と、祝、奉、沖、のお、と、回、お、早、
 香、お、の前、と、跪、香、お、の、香、と、お、て、上、香、お、侍、饜、侍、饜、
 の、饜、と、掲、と、と、車、の、側、階、と、昇、と、跪、て、お、と、と、進、む

祭、と、是、と、戴、き、何、と、香、お、の下、と、酌、と、侍、饜、と、饜、
 と、持、帰、お、お、と、依、伏、再、お、予、才、お、位、と、跪、と、お、と、何
 西、の、市、又、祝、在、と、向、と、立、時、と、眞、饜、例、階、と、り、昇、と、
 右、角、車、の、中、祝、と、祝、西、と、向、と、立、丑、手、と、こ、て、り、と、眞、饜、お、
 しく、お、も、手、改、ま、しく、後、
あ、く、お、や、い、 監、饜、と、授、と、り、と、り、ち、お、早、候、と、お、と、と、り、
 版、美、高、齋、次、身、と、ん、侍、饜、と、授、く、侍、饜、と、掲、と、り、
 堂、内、と、り、と、眞、饜、授、眞、饜、と、掲、と、り、と、祈、お、の、白、干、上、
 並、お、と、向、と、立、司、饜、お、と、お、て、司、言、の、お、と、向、酒
 と、り、と、予、少、と、向、と、立、お、と、め、お、お、と、眞、饜、早、り、を
 足、て、又、香、お、の前、と、お、と、む、り、と、て、お、位、の、上、と、跪、侍、饜、司、饜

の持より初献の爵と接し跪てあきまは進むあき
 りこと戴き奠饌を授く奠饌跪て接し中前版
 羹の前より毎日白巾と持く前へとりあは向て立
 侍饌を授く接し跪くあきまは進むあきまは戴
 き奠饌を授く奠饌跪て接し中前版の羹より
前ハ此中奠饌を授く一也此ハ此中奠饌を授く一也此ハ此中奠饌を授く一也
あきまは戴き奠饌を授く一也此ハ此中奠饌を授く一也此ハ此中奠饌を授く一也
 祝の側階より昇り祝板を承跪て戴く干時法
 執る皆跪く祝祝文を讀み干時法執る皆跪く
 是よりさへ進饌敬饌三行と
是ハ此中奠饌を授く一也此ハ此中奠饌を授く一也此ハ此中奠饌を授く一也
三行並て饌 是後より用を一一行と侍饌を授く侍饌を
年ハ此中

内より奠饌を授く奠饌接して敬饌の列より是を
 献の侍饌より亞献の爵と奠し侍饌初献の爵と奠
 して侍饌するを并に初献の侍饌より司持酒注
是ハ酒樽のハハ瓶ハ酒を入 侍饌を授く侍饌を授く是を
是ハ酒樽のハハ瓶ハ酒を入 侍饌を授く侍饌を授く是を
 接し二献の爵をあは向く酒と注ぎし是は侍人のなり監
 饌を授く茶鏡ときた用を一一茶鏡を一一侍饌を授
 くる奠饌を授くる是を接し中前の卓子五粒の羹の前
 又是より奠饌を授くる奠饌例階より下
 本位より序立よりあきまは侍る事とあきまは侍る事と
 已階より一掃平より出るは奠饌本位の例階より昇り

祝西の例階より昇りてあるより入奠饗中前の帛と糸と
持祝祝板と持く奠饗と仰ぐをとお各帛糸の例
階より降りて帛祝文と監饗を授け又帛位より糸を監
饗帛と種に祝文と焼饗執るより糸位と種を階下よ
りして捧げ奉る

奠中前室四内改りて

通俗儀注

十古お中よりと陳設儀を奉り、祝執る階下、列に
より持りて將るより、夜燗燗セ饗明、代おしある、
一ちのちをも、祝執る階下、二行に列に四お奉る司

盥司司帛各、生位、祝傳饗傳帛奠饗、并祝文を奉
前、序をあるより、入禮祝所、至り司盥板を授け手中と
進め盥洗卒て糸と階下より起きあるより向く正立一捧奉
階より昇時司司帛時降神と饗と種を載持く前、立
り司司帛を授く司司帛を奉酒と斟司司帛を奉るより
向く正立あるより入香帛糸の糸お位より上と跪き香合の
香成れて上香は好傳帛時降神の帛を授けて帛の例
階より昇りて跪き糸と糸をむかひて糸と載き祝文香
帛の下より酔く傳帛を饗と持帰る糸と仰ぐ帛平身お位
と敬し奉る糸の糸と祝帛を向く正立より奉饗例階

するに昇ておる内東の中はむむ向く立監膳茶籠
茶籠と持てきて扱ふも、こゝろ茶籠各一と盤又載る茶籠
置く侍膳をそと揃へて側階より昇り茶籠を内より
そと出揃へて御前中一に卓子五行の物をおるを扱ふも
こゝろ凡そ夜膳は夜膳しお扱ふ事と茶籠皆白蓋茶籠
大茶籠は蓋をとり茶籠は扱ふも、茶籠の蓋は
扱ふも、扱ふも、こゝろ侍膳をそと揃へておる内より茶籠
又扱ふも、扱ふも、一、真膳茶籠をとり、茶籠の蓋は
扱ふも、扱ふも、白河とくけし、
向く立監と茶籠の蓋は、真膳茶籠をとり、又香出物の蓋は

事としてお位の上は跪て上番侍御司御の持たる御と揃へし
跪ておるは、進むおるは、茶籠は扱ふも、扱ふも、
揃へし御前飯蓋茶籠を扱ふも、扱ふも、凡そ夜御前
と扱ふも、こゝろ少く向て立侍膳をそと揃へておるは、
茶籠を扱ふも、茶籠を扱ふも、扱ふも、跪て揃へし御
前御の言ふは、早く側階よりこゝろ、中位より序立す記
の側階より昇り、御板を跪て扱ふも、平時迄執る
皆跪く御扱ふも、御扱ふも、跪て扱ふも、御扱ふも、
して再び昇り、おるは、御扱ふも、御扱ふも、御扱ふも、
おるは、御扱ふも、御扱ふも、御扱ふも、御扱ふも、

を内に入高膠、沖前の帛と云て持次祝板と持く、奠饗
既少く、若くは各在ぬの例、皆より降て帛祝文と監膳、
授け又本位より序立に監膳帛と瘞、祝文と燒紙、執事
各本位留就き階下、列して一稱祀畢

陳設之式

一子と奉分衣と奉とを以て、^切用今井中帛中
箱已し、各々積る、是は、
設ありんか、祀是ぬ

一三物と大腿奠多し三種也、
鴈鴨赤紐奠を鯛
鰯鮓あとお申し、不本、
鯛奠を黄院中、
自今

己辰奠物も必、
鯛奠とお申し、
一のト也、
己し四月

奠の様被、
作也、
も

一三物と大腿、
向ぬ、
おぼ種も、
香を種も、
鯛奠、
可也

一昨より上、
と申し、
二月は、
多し、
是は、
向中、
不本、
可也、
は、
何也、
事

一之縁、
七、
各々、
積る、
是、
も、
し、
は、
多し、
は、
中、
甘、
新、
の、
也

元禄二年己四月十八日

- 醬 帛 索麩
- 将酉油 鰯 燭臺
- 鰯 鮓 鯛 鰯
- 鮓 鯛 鰯
- 淡菜 獨活 豆腐 龍眼肉

茶鐘 醋 江瑶柱 乌贼 山藥 麩筋 羊羹

爵 快子 飯茶鐘 形鹽 野鴨 干海參 藕 香菰 饅頭 火腿 香栗

茶鐘 肉桂 鮫魚 鷄卵 筍 牛蒡 團餅

爵 和羹羹

胡椒 鮑魚 鰻魚 蕨 糟瓜 橙予

鮭魚

燭臺

元祿十二年
四月十六日 執事

布衣 中村新八

陳設

司鹽 司尊 司爵 司帛 傳饌 傳爵 奠饌 奠爵 接帛

喜禊 小野宗三 日 淺沼四郎八 日 服部新介 布衣 上 彦四郎 日 一松又三進 日 伴五百衛門 日 森 丈介 日 御通事 乃乃乃乃乃 日 御小姓頭 空月也乃乃 日 浅羽傳四郎

祝

省牲監饌

中村新八

山野宗三

海沼四郎八

服部新介

同十五年午四月十八日

索麩

白花大菜
石花菜
鶏卵
鶏子菜

茶鐘

肉桂

比目魚

鯉魚

竹筍

豆腐

饅頭

醬油

鰻魚

對蝦

薯蕷

梅香

蜜柑

野雞

飯

茶鐘 醋

江瑤柱

炖鴨

松菰

乾蘿蔔

鯨餅

鯉魚

蝦

栗子

おしん

九年母

獨活

胡椒

年魚

鰻魚

胡蘿蔔

麩筋

胡桃

糖餛飩

鷹

羹

鯛魚
芥菜
岩菰

茶鐘

形鹽

乾海參

鱒魚

牛蒡

雞團

糟瓜

乾柿子

沙代お儀

一手水お儀

一歩階お儀

一上香お儀

車向じ

一大茶碗お儀

次お儀

一二款三款と多討たし目

一 多と供平ら付撰考あると後述し時毎好本借分下り
考下らる一編 江三平

中身付致おるは宛名目には何事し 辭有先生初考と書

之候時交田代一抱は 万類の元 何れも方家考は

何處も付ら也致る知路意なる言に 一抱も一抱もなる者

其方致お肩おしは病中取大筆秘入りおれら

位候一抱は大山村、此頃病氣甚然此方おれ考、此頃

初考也の考初し何れも生考考とお備り一抱の類と云に
江三平

其方山自編しをある急しく人物も一は是は何れも
しは後考

一 古し候し何れも交らぬ和み筆板り候は 何れも有る也

其考新官と云ふ是は板下、用と先名備うん此考

二 何れも多之と云ふは、此考中、其考官元何れも

考り多考是道候と云ふは、何れも何れも、何れも

代考一入り考候かろうは、何れも、何れも、何れも

別考分、此考用と云ふは、何れも、何れも、何れも

候考、何れも、何れも、何れも、何れも、何れも

何れも、何れも、何れも、何れも、何れも、何れも

とあるに知る事印にあるに中又

家の様なるに引しるの一件にて証付中記のついで

先よりしき収まりに成しきに故に先着あり板行法

かして成せる。此の如きは西書より成るるやうなり

かく事多かるに方と板新し成付に引しるを記す

あはるるにむとるに引しる

酒泉弘

仙仙昆

安藤志太兄

ふしあふろしあ上志務町海戸海人の十回あ男也

出火大由去回信高なる信高信し山陽と二三十条

段段有り 風節能なる備西あふりせり也なるに

中治重く信高より信高なるなり

十二方十の之るは女付進におしよてお林あり

上し信信 湯採娘能皆来 湯花なるに信高

一又禁中より十名を重時御事、苗志をよきし中を

少卿宗より信信ありた何し信信もきつたを

とらふをわし十名を田代へ進し信高と西信高

とす。此は信高より十名を田代へ進し信高と西信高

伊代おる也信高御事。信高よりし信高一入

此より心づかぬ、いし祝文を核に成りたる、
其の御縁は、此の御縁、火燒十餘年お記
し、一入、感慨あり、心を
多量多量し、此の御縁、
此の御縁、
御上、

一、祝文、
不が、
の、
方、

一、祝文、
別、
す、
元、
先、
お、
と、
一、
一、
一、
一、

一、
一、
一、
一、

一 かつら 二 升 五 卷 一 四の三 天 吳銀大 一 たいらん 二 巻 終 考 二 七

一 志 尚 方 所 考 二 本 一 〇 三 七 二 本 由 二 本 八 五 多 一 本 八 少 多 一 一 大 折 考 一

一 大 折 考 一 一 十 五 枚 切 八 帖 一 大 折 考 一 一 十 五 枚 切 八 帖

一 大 折 考 一 一 十 五 枚 切 八 帖 一 大 折 考 一 一 十 五 枚 切 八 帖

一 大 折 考 一 一 十 五 枚 切 八 帖 一 大 折 考 一 一 十 五 枚 切 八 帖

右 甲 白 十 七 卷 〇 〇 〇 〇

右 辭 中 見 生 初 考 各 篇 大 儀 注

〇 〇 〇 〇

右 辭 中 見 生 初 考 各 篇 大 儀 注

朱文恭手蹟之覺

有 あり

一 深 衣 議 軸 高 三 卷

一 伯 養 記 一 卷

一 端 亭 記 一 卷

一 視 箴 等 一 卷

一 松 石 等 大 字 一 卷

一 古 來 公 子 等 一 卷

一 學 而 篇 軸 一 卷

一 劍 銘 〇 〇 〇 〇 一 卷

一 酒壇山序 一卷

一 書庫銘 新軸 一卷

一 書先世縁録 一卷

一 祭文 一卷

一 天保九如 軸 壹卷

一 民用和睦 一卷

一 紅紙尺牘 軸 壹卷

一 紅紙尺牘 軸 壹卷

一 尺牘 肅啓軸 壹卷

一 尺牘 若祝新禧 軸 壹卷

一 尺牘 軸 壹卷

是申二月中山由孫在

此内之取用之紙は後本より取之

一 殿齋軒 三枚

此内之取用之紙は

右古紙軸表紙也 何付の紙も小可紙也

あふて中山

一 安土町紙紀子 後表紙也 三枚

表紙は 何付の紙も小可紙也

一 日 昇 慈 恩 寺 壹 冊

是て我子他子如新

一 紀 事 并 越 一 首 壹 冊

一 丁 未 年 六 月 壹 冊

一 勿 齋 記 壹 冊

一 漢 唐 官 官 論 壹 冊

一 後 聖 園 賦 壹 冊

一 庭 右 路 壹 冊

一 本 月 初 四 壹 冊

一 第 四 壹 冊

一 科 場 表 再

是ハ上表紙半枚斗自為子亦ハ他為子也

一 大 門 歌 後 聖 園 寺 再

是ハ他為子也

右十冊親為子他子の親有し此内他後書也
伊勢物とのありて

一 天 保 九 如 壹 冊

一 先 祖 書 五 冊

一 天 下 之 所 傳 一 卷

ハシタ物

古中
一書劍卷 五七頁のりまじりて古中 一板

白紙
一勸懲 一板

史陵
一官銜帖 一板

口
一祭文章稿 一板

口
一東帖 一板

口
一扇 ハシタ物 一板

右の行と記名を以てして後下字稿とす

史陵
一及第し板行 一板

史陵
一関防 一板

口
一奏疏 一板

是の前方自筆のし不先年又恭孫朱天生
也等、多き自筆の天生、らりて方、寫
る多し

史陵
一先祖紙牌 十三板

あり

右十三行ハハるる、の如くありてる也

都方回板六行

史陵
一初試 ハシタ物 一板

所書新田おぼしきものなる人々を
の屋敷のりりる家らるや

一版戸新なる之保武事と云ふ
るるり新なる御書にあり
火の書も御書にあり
也之は御書にあり
一之書先きし古なる書
不中なる御書にあり
御書にあり
ろく御書にあり

元禄三

元禄四

元禄五

おぼしきものなる人々を
右史館新多に
右史館新多に

小野宗三郎米封学ヲ好ミ 浄水先生ニ従事ス 先生コレニ書籍
及ニ硯盞等ヲ賜フ 今家ニ在ル硯ハ其色黒シテ上大ニ下殺リ表ニ文字
アリ蓋ハ 十リ近頃ニテ画像モ傳ヘテアリシカ他ハカシテ失ヘリトソ
常水先生常ニ沐浴シ賜フ時湯ヲ汲セ手拭ヲ浸シテ能シホリ 田體拭セ
賜フ斗ニテ口如ク湯ヲ灌キアヒルハナカリシトフ
常水先生從フ者朝ニ庭ノ掃除スル時ハ其度毎ニ錢ヲ應美ニ賜フ
此ハ餅菓子等ノ代渡ナリ然レニ至テ輕微ナルヲナリトソ常水先生遊
畫ノ心アハハアラス從者ニ與フ所ノ錢ニテ明朝ナトシテハ物價廉ニシテ相應
ニ買得ルヲトスルナリ

右三條小野久米ハ 活

吾門人豊臣顯忠氏奥村、名曰庸禮、遂巡講退、若不胜衣、教
謹者、每矣、侶乎中之所羨者、奮迅激昂、剛果決断、即、因、臣
教、強、名、其、齋、亦、董、安、于、佩、弦、之、意、也、多、有、之、集
按、庸、礼、俗、稱、因、幡、カ、奥、村、因、幡、カ、加、賀、彦、ノ、傍、カ、リ、
清、乃、季、教、名、務、本、初、及、吾、門、遂、從、甘、居、而、北、帰、中、曰、氏、古、市、
師、弟、子、事、重、不、可、言、也、文集、論、多、有、剛、伯、規

文恭先生、從ヒシ僕、富ツツクリ、野菜ヲ種テ、先生、コ、ス、メ、ン、ヲ、欲、ス、
先生、怒、リ、テ、野、菜、ヲ、リ、ク、枝、カ、セ、仰、ラ、シ、シ、ハ、百、姓、ノ、為、ス、キ、一、ヲ、ナ、シ、テ、利、外、ス、ル、
ハ、本、意、ナ、ラ、ス、ト、テ、富、ツ、ツ、ク、也、一、ヲ、林、ホ、セ、ラ、シ、ト、ナ、シ、

乃、蘆、吹、ハ、十、七、元、種、也、信

